

中国電影大観



パープル・バタフライ
(紫蝴蝶 / PURPLE BUTTERFLY)

2007(平成19)年11月23日鑑賞(シネ・ヌーヴェオ)

監督・脚本=婁燁^{ロウ・イェ} / 出演=章子怡^{チャン・ツイイー} / 仲村トオル^{フエン・ユエンジョン} / 馮遠征^{ロウ・イェ} / 劉燁^{リウ・ベンセン} / 李冰冰 / キン・エイ (アスミック・エース配給 / 2003年中国、フランス映画 / 128分)

第4章

日本と中国の浅からぬ縁

……『HERO (英雄)』(02年)と『LOVERS (十面埋伏)』(04年)の谷間(?)に、^{チャン・ツイイー}章子怡が抗日活動組織の活動家というすごい役に挑戦! 舞台は上海。時代は日華事変の直前。そして共演は仲村トオル。暗い質感と揺れる映像そしてクローズアップの多用が特徴だが、雨のシーンの多さにもビックリ! アツと驚くラストシーンを含めて、^{ロウ・イェ}婁燁監督の問題提起を、日本人としてしっかりと受け止めたいものだ。

 原題、英題、邦題すべて同じだが……?

中国映画は原題と邦題が全然一致しないため、邦題を言っても中国人には全く通じないものが多い。その典型は『初恋のきた道』(00年)で、その原題は『我的父親母親』。ところが、この映画は、原題『紫蝴蝶』、英題『PURPLE BUTTERFLY』、邦題『パープル・バタフライ』とすべて同じ。もっとも、パープル・バタフライとは紫の蝶々だが、それだけでは一体何を意味するのかサッパリわからない。

実はこれは、^{フエン・ユエンジョン}シエ・ミン(馮遠征)をリーダーとする抗日活動組織の名前。したがって、この映画はかなり物騒なお話。そう、この映画は1937年の日華事変開始直前、排日・抗日運動が盛りあがる1931年の上海を舞台とした物語なのだ。しかし、そんな映画にあの^{チャン・ツイイー}章子怡が何の役で……? ひょっとして抗日活動家として……? また、日本人俳優仲村トオルがどんな役で登場するの……?

ロウ・イエ 婁 燁監督のこだわりの職人芸が

私が観たロウ・イエ 婁 燁監督の『ふたりの人魚』（00年）は、上海の蘇州河を舞台に、美しい人魚をキーワードとして、「男は愛する女をどこまで探していけるのか」というテーマを面白く展開させていく物語だったから、1人2役を演じた周迅ジョウ・シュンを中心とする美しい映像が印象的だった（『シネマルーム5』253頁参照）。しかし、『パープル・バタフライ』では徹頭徹尾ロウ・イエ 婁 燁監督のこだわりの職人芸が貫かれている。

その第1は、映像の画質（質感）とカメラワーク。この映画はもちろんカラー作品だが、冒頭は1928年の満州、その後は「それから3年後」の31年の上海を舞台としているため、そんな時代にふさわしく（？）暗いトーンで統一されているうえ、不安定な社会情勢や駅のプラットホームの喧騒の中での銃撃戦をリアルに表現するため、カメラの動きや焦点の合わせ方が不安定。したがって、今風の日本映画に見馴れた目にはちょっと疲れる感じがするかも……。

第2は、クローズアップの多用。というより、人物描写はそのほとんどがクローズアップという感じ。したがって俳優の緊張感は大変だろうし、よほどしっかりした演技でなければアップに耐えられないはず。

第3は、セリフの極端な少なさ。1928年の満州を舞台とした伊丹（仲村トオル）と辛夏シンシア（章子怡）との淡い恋模様では、セリフは「明天見（また明日）」くらい。また、辛夏シンシアの兄が日本の暴漢（右翼？）に刺殺され爆弾テロに遭うシーンでも、辛夏シンシアの叫び声が印象に残るくらいで、ほとんど無言劇に近い。こんな緊張感も、今ドキのテレビドラマ仕様の安易な日本映画に見馴れた人にはちょっとしんどいかも……？
もっとも、『パープル・バタフライ』でも水野衛子氏が日本語字幕を担当しているが、1本あたりいくらかギャラを決めているのであれば、セリフが極端に少ないこの映画は楽に稼げたのでは……？

第4は、セリフの少なさをカバーする音楽のすばらしさ。『パープル・バタフライ』は『HERO』（02年）と『LOVERS』（04年）の谷間となる2003年に中国で公開されたこともあって（？）その人気はイマイチらしいが、2003年の第56回カンヌ国際映画祭ではコンペティション部門に正式出品され高い評価を受けたとのこと。

テーマが重々しいうえ、このようにロウ・イエ 婁 燁監督が随所にこだわりの職人芸を見せているから、2時間8分の間ずっと緊張感を保つことに疲れるかもしれないが、逆に充

足感があることもたしか。たまにはこんな重厚な映画を……。

今日も雨、明日も雨。そしてこの日もあの日も

この映画で目につくのはやたら雨のシーンが多いこと。上海が特に雨が多いわけではないから、これは明らかに婁 燁^{ロウ・イェ}監督の演出によるもの。その狙いは第1に、前述の映像の質感を暗いトーンで統一するため。当然、上海にもさんさんと明るい太陽が照りつける季節や快晴の日はたくさんあるが、それよりも雨がザアザア降っている方が暗いトーンの画像にピッタリするのは当然。

狙いの第2は、なぜか雨の中だと登場人物の緊張感を強めたり、2人を引き裂くのに効果的だから……？ そう思わざるをえないほど雨の日が多い。特に私が指摘しなくても誰もが気づく点だが、なぜそんな演出をしているのかについては、あなたにも是非考えてもらいたいものだ。

なぜ伊丹が日本軍諜報機関へ……？

『パープル・バタフライ』は婁 燁^{ロウ・イェ}監督が脚本も担当しているから、機会があれば質問してみたいのは、1928年に満州で満鉄に勤務していた伊丹が日本へ帰国して3年後になぜ上海の日本軍諜報機関に、最高責任者山本（キン・エイ）に次ぐナンバー2として赴任してきたのか、ということ。ストーリー展開中で紹介される伊丹の経歴には、中国語が達者ということ以外特に諜報機関に結びつくものはない。また、1928年満州で彼が辛夏^{シンシア}と共に通っていたのはイギリス文学の講座ということだから、なおさらキナ臭いにおいは全くない。

そんな伊丹が急遽訓練を受けたとしても、わずか3年で当時の日本にとってもっとも重要な拠点である上海の諜報機関のナンバー2として赴任してきたというのは少し不自然では……？

スードウー タン・イーリン 司徒と依 玲の悲劇は……？


辛夏^{シンシア}は満州から東京へ帰っていく伊丹を涙ながらに見送った後、兄が殺されたため、その後パープル・バタフライの組織に入り、名前も丁 慧^{ディン・ヒューイ}と改めていた。そして、やはり美人はどこにいても目立つものと見えて、丁 慧^{ディン・ヒューイ}はどうもパープル・バタフライのボス、シエ・ミンといい仲のよう……？



シエ・ミンは日本軍諜報機関のボスである山本の暗殺を狙い、逆に山本はパープル・バタフライの組織壊滅を狙って情報合戦を展開していたが、そんな争いの巻き添えをくった最大の被害者が司徒スードゥー（劉燁リウ・イエ）と依玲タン・イーリン（李冰冰リー・ビンビン）。

この映画の中では珍しい2人の幸せそうなデートの様子が描かれた後、駅に迎えにきた依玲タン・イーリンの前で司徒スードゥーは逮捕され、その混乱の中、依玲タン・イーリンは流れ弾にあたって死亡してしまうことに。依玲タン・イーリンを演ずる李冰冰リー・ビンビンは、『シルバーホーク』（04年）などに出演した美人女優で、すぐに死なせてしまうにはもったいないが、ストーリーの展開上仕方なし。司徒スードゥーが逮捕されたのは、司徒スードゥーが自分のものとまちがえて列車の隣の席に座っていた男の蝶のブローチが付いた上着を着てプラットホームに降りたため。しかし、当然司徒スードゥーはなぜ自分が逮捕されたのかを知る由もなかった。

逮捕、拷問という散々な目にあっただけで、伊丹から「お前の逮捕は人違いだった」と言われて釈放されても、司徒スードゥーが率直に喜べないのは当然。しかも、恋人の依玲タン・イーリンはその混乱の中で殺されてしまったのだからなおさら。そのため、その後の展開ではこの司徒スードゥーの動きが大きなポイントに……。

 ディン・ヒュイ 丁 慧への指令は……？

山本に次ぐナンバー2として伊丹が新たに赴任してきたことを知ったシエ・ミンは、

抗日組織のボスとして丁^{ディン・ヒェイ} 慧に対して伊丹と接触するよう指令を出した。そんな指令を出せば、今は丁^{ディン・ヒェイ} 慧と名乗っている辛夏^{シンシア}と伊丹がヨリを戻すかもしれない、というより、少なくとも表面上はヨリを戻すことが至上命題となるから、今や丁^{ディン・ヒェイ} 慧の恋人として肉体関係を重ねている(?) シエ・ミンとしてはそんな指令を出したくないというのが本音。しかし、伊丹から情報を得るためには任務に私情をはさむことが許されないのは当然で、その点の苦しさはシエ・ミンも丁^{ディン・ヒェイ} 慧も同じ。その結果、上海のまちで偶然(?) 再会した伊丹と丁^{ディン・ヒェイ} 慧は再び肌をあわせることに……。

情報戦のクライマックスは……？

『アナーキスト』(00年)は、抗日テロ組織に属していた5人の韓国人「アナーキスト」たちの情報戦を中心とする活躍と悲しみを描いた珍しい韓国映画だった(『シネマールーム8』89頁参照)が、『パープル・バタフライ』も、これとよく似た雰囲気をも漂わせた情報戦が展開されていく。そのハイライトはある会合に山本が出席するという情報を得たことにより、ついに迎える山本暗殺の決行の日のシーン。もっとも、伊丹はパープル・バタフライがそれに向けて総力を結集しているという情報を入手していたから、逆にそれを利用して抗日組織を一網打尽にしようともくろんでいたが……？

前述のようにこの映画は極端にセリフが少ないうえ、ナレーションのようなヤボなものもないから、ストーリー展開の把握は容易ではない。したがって、よほど注意してスクリーンを観ておかなければ、クライマックスの展開についていけない可能性も……？

どんな結末を予想……？

香港で大ヒットした劉^{アンドリュウ・ラウ} 偉 強監督と麥^{アラン・マック} 兆輝監督の『インファナル・アフェア』(02年)、『インファナル・アフェア～無間序曲～(INFERNAL AFFAIRS II)』(03年)、『インファナル・アフェアⅢ／終極無間』(03年)をハリウッドがリメイクしたのが、レオナルド・ディカプリオとマット・デイモンが共演したマーティン・スコセッシ監督の『ディパーテッド』(06年)だったが、その悲劇的な結末は皆様ご承知のとおり。やはり、ハリウッドは皆殺しが大好きなのだとあらためて痛感したもの。しかし、この『パープル・バタフライ』の結末は……？

『ディパーテッド』のような単純明解なものではなく、かなり手のこんだものになっているが、仲村トオルのカッコいい演技や章子怡チャン・ツイイーのアップの表情による表現力の豊かさをタップリ味わうことができるから、そんな結末に十分注目を。また、私はよく知らなかったが、司徒スードウーを演ずる劉燁リウ・イエの演技の冴えにも注目！

プラス 8 分間の評価は……？

『パープル・バタフライ』は2時間を8分間だけ超過しているが、その超過分は章子怡チャン・ツイイーには珍しいハードなセックスシーンで、そのお相手はシエ・ミン役フェン・ユエンジョンの馮遠征ロウ・イエ。なぜここにそんなシーンが入るのかについて婁燁監督は何も説明しないから、その賛否は分かれるはず。

さらにこの映画にはもう1つおまけがある。それは日本軍による1932年の上海爆撃と1937年の南京爆撃そして近時大きな論点となっている「南京事件」のドキュメントフィルムを流すシーン。婁燁監督ロウ・イエがどういう意図でこれを最後に組み入れたのかはわからないが、これについても賛否が大きく分かれるはず。ちなみに、私は断固不要論だが、あなたは……？

2007(平成19)年11月24日記